かっぱの硯

長井市・米沢市六郷の昔話

編　武田　正

長井市・米沢市六郷の昔話

かっぱの硯

目次

第一部　長井市五十川　大道寺重栄翁

1 桃太郎 5
2 瓜姫子 11
3 くいごこむかし 16
4 いたちとねずみ 27
5 牛方と山姥 30
6 きつねとかおす 37
7 浅立の蛇 42
8 角力とりときつね 42
9 旅人と化けもの（三枚のお札） 47
10 笠地蔵 52

第二部　米沢市六郷の昔話（二）

1 コロリの幽霊 56
2 稲場の土ぐも 57
3 けらっぽ峠のきつね 58
4 姥捨 59
5 魚女房 64
6 黒滝 67
7 むじなむかし 68
8 佐兵ばなし 70

9 角力の話 71
10 黄な粉じじい 73
11 誰だ屁 74
12 屁たれ嫁 75
13 上杉さまと鴨とり 79
14 狐退治 80
15 古屋の漏 83
16 カセドリの狐 85
あとがき 107
17 栗拾い 87
18 本間さま 89
19 長者ばなし 91
20 由井正雪 93
21 河童の硯 95
22 猿蟹合戦 99
23 五十騎町の猫明神 103
24 時田の変り松 105

凡例

一、長井市・米沢市六郷の昔話は共に本年4月にテープにとったものを、翻字したものである。

二、翻字に当たってはなるべく発音に忠実を旨としたが、慣用的に使われる「あまぇええ」は「あまりええ」としたように、表記に問題が残るものもないわけではない。

三、この地域、話者は、これで終了したものではなく、今後も継続して蒐集すべきことを銘記したい。

第一部　長井市五十川　大道寺重栄翁

1　桃　太　郎

むかしあったけど。

あるところになぁ、おじいさんとおばぁさんといだっけど。おじいさんは山さ柴伐りに行ったど。おばぁさんは川原さお洗濯に行ったど。

ほうしておばぁさんが川原でザフザフ、ザフザフて洗濯しったところが、はるか向うから、ドンブリコ、ドンブリコて、大きいな桃は流って来たど。

「あらららら、これはまぁ大きな桃だごど。こいつ、まず拾って、こりや、おじいさんと分けて食(か)んなねごで、こりや」

なて、おばぁさんは「こっちゃ来い、こっちゃ来い」て、その桃をひょいと拾ったど。そうしてお洗濯を終して、その桃持(たが)って、家さ帰って来たど。そうしてお

佛さまさそいつ上げ申して、ガエンモンモンてしたど。
それから、おばぁさんは晩の仕度をしていたところぁ、おじいさんがいっぱい焚物（たきもの）背負って帰って来たずも。
「ばんば、ばんば、今、来たどこだ」
「あらあら、おじいさん、早く帰りやったごど。あのよ、さっきだ、川原さ洗濯に行って、桃大きな拾ってきたから、早く寄って上がれ、まず」
おじいさんは足洗って家さ寄ったど。そうしておばぁさんが俎と包丁もってきて、その桃を割んべど思ったところぁ、桃はパクッと割って、中から赤ん坊が出だど。
「あらら、まず、これは何ちゅうごんだ。男の赤ん坊出たでこら、これはええこどだ。んじゃ、桃から出たから、桃太郎と名付（つ）ろはぁ」
て、そうして、おじいさんとおばぁさんが桃太郎を大変にかわいがってな、おじいさんは町からお魚買ってきて、おばぁさんはそれを焼いたり、煮たりして、
「ほれ、桃太郎。ほれ、桃太郎」

て、食わせるもんだから、桃太郎はだんだん大きくなって、そうして大変体も大きくなって、力も強くなったずも。

で、ある時、桃太郎は、

「おじいさん、おばぁさん、おれは鬼ガ島さ、鬼退治に行ってくる」

「何を、桃太郎。お前、鬼ガ島さなど行がんねって、行かんねって。もし鬼になど殺されっど、ほれぁ困ったことだから、どうか行かねで呉ろ。桃太郎」

て言うげんど、桃太郎は、

「いや、大丈夫だ。おばぁさん、おれはこのように体も大きくなったし、力も強くなったから、桃太郎は鬼ガ島さ行って、鬼退治、必ずして来っから」

て、言うて聞かなかったど。

「ほんじゃらば、行って来っどええごで」

て、おじいさんはいろいろなものを、まず用意して呉っじゃ。おばぁさんは、

「ほんじゃらば、キミダンゴでもこさえて呉っか」

て、おばぁさんはキミダンゴを拵って呉っだど。ほうして、桃太郎は野袴をは

いで、陣羽織を着て、小旗を持(たが)って、刀をさして出かけたど。腰さ、おばぁさんがこさってくれたキミダンゴを下げて、そうして野越え山越え、野越え山越えして行ったど。

そしたれば「ワンワン、ワンワン」、犬が一匹来たど。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさござんのだ」

「ああ、おれは鬼ガ島さ鬼退治に行くなだ」

「お腰に下げたものは何だ」

「これは日本一のキミダンゴ」

「ほんじゃ、キミダンゴ一つおくやい。そしてわたしもお伴させておくやい」

て言うもんだから、桃太郎はキミダンゴを一つくれて、そうして犬に旗持(たが)かせてまた行くと、野越え山越え行ったところが、今度は猿が一匹来たど。「キャッキャッキャッキャキャ」なて。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこまでござる」

「うん、おれは鬼退治に行くどころだ」

「お腰につけたものは、それは何だべ」
「ああ、これは日本一のキミダンゴ」
「んでは、一つください。ほうして、おれもお伴したいから」
て言うもんだから、桃太郎はまたキミダンゴを一つ呉(け)で、猿に槍持(たが)かせて、犬と猿と連れて行くとこだ。野越え山越えして行ったところが、「ケンケン」なてキジは一匹来たど。
「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさござる」
「鬼ガ島さ鬼退治に行くなだ」
「お腰のものは何ですか」
「これは日本一のキミダンゴだ」
「わたしにも一つください、お伴しますから」
ほうして今度は、犬猿キジをお伴して行ったところぁ、こんど海さ出きた。
そっからキジは飛び立って、鬼ガ島を見に行ってきた。桃太郎も犬も猿も一緒に舟さのって、鬼ガ島さ出かけて行った。鬼ガ島さ着いてみっど、そこには赤鬼

と青鬼と門番していたけど。そこさ犬、猿、キジと桃太郎と上がって行って、桃太郎は一番大きな鬼さかかった。んだもんだから、犬も猿もキジも負けじと働いたもんだから、鬼ガ島の鬼がみな降参して、宝物みな出してあやまった。んだもんでその宝物を車さつんで、そうしてこんど帰って来たど。そしてまた野越え山越えして帰って来たところぁ、おじいさんとおばぁさんが出迎えて、

「いや、よく帰って来た。こがえに宝物などいっぱい、まず持って来たことが」

そうして喜んで喜んで、桃太郎とおじいさんとおばぁさんと、仲よくいつまでも暮したけど。とーびんと。

2　瓜姫子

むかしあったけど。

あるところになぁ、おじいさんとおばぁさんといだっけど。そうして一人の娘がいて、その娘、瓜姫子ていうたけど。おじいさんもおばぁさんもその瓜姫子を大変にかわいがって、「瓜姫子、瓜姫子」て、育でていだったど。また瓜姫子も大変孝行で、やさしい娘で、大きくなったもんだから、機織りされるようになったど。毎日機師（はたし）さ上がって、そうして機織りなどしったったど。トントンカラン、トントン、カランてな。そうしておじいさんとおばぁさんは、その瓜姫子が織った布を町さ持って行って売って、お魚を買ったり、うまいものを買ったり、着物を買ったりして暮していたなだけど。

ある時、おじいさんとおばぁさんは二人で瓜姫子の織った反物を背負って、町さ出かけた。出かけっどき、瓜姫子さ、

「瓜姫子、今日はおばぁちゃんとおじいちゃんと町さ行って来っから、誰ぁ来たっ

て決して戸を開けるでないぞ、天邪鬼など来っど悪れがらな、決して戸開けんなよ」

「はい、おじいちゃん、おばぁちゃん、決して心配しねぇでおくやい。瓜姫子は決して戸など開けねから…」

て言うもんだから、おじいさんとおばぁさんは反物背負って町さ出かけたど。

そうしたところぁ、しばらく経ってから、表さ誰か来たど。

「瓜姫子、機織りしったか」

「ほだ」

「なんぼ織ったか見せねが」

て言うごんだど。

「いや、おじいちゃんにもおばぁちゃんにも言わっだも、決して戸開けんなて言わっだから、戸開けらんねもの」

「そがなこと言ねで見せろ、ちいとでええから」

て言うごんだど。

「いや、おじいちゃんにもおばぁちゃんにも言わっだも、決して戸開けんなて言わっだから、戸開けらんねなだ」
何べん言うても聞かねごんだど。
「ちいと開けて見せろ、小指一本入るぐらいだらば、ええがんべした」
て言うもんだから、瓜姫子はまたちいと開けて見せたど。そうしたところぁ、天邪鬼だけずも。いや、瓜姫子、魂消てしまったずだごではぁ。ほうして魂消た瓜姫子を天邪鬼は機師から引ずり落して、いじめではぁ、殺してしまったごんだどはぁ。ほうして天邪鬼は瓜姫子に化けて、機師に上がって、機織りの真似しった。そのうちにおじいさんとおばぁさんが町からいろいろなもの買って、お土産を買って帰って来たど。
「瓜姫子、誰か来ねがったか」
「誰も来ねがったな」
天邪鬼は瓜姫子に化けて知しゃねふりして。
「ほう、よく、ほんじゃええがったでそ、さぁこっちゃ来い。いろいろお前の好

きなものも買って来たし、美しい着物も買って来たぞ」
「ほう、おしょうしな、な、ほんじゃ」
なて、格別そがえ、にこにこても言ねで、そうしているもんだから、おじいさんもおばぁさんも何だか不思議には思うたげんども、天邪鬼とは思わねんだし、そうしていろいろお土産にうまいもの出して呉っじゃところぁ、片端から化げっだ天邪鬼だから、ガモガモと食うずもの。
「なえだ、瓜姫子、そがえに一度に食ってもええなだが」
「ええなだ」
なて、ほうして、
「御馳走さま」
なて、今度また機師さ上がって、機織りの真似すっこんだど。
トントン　カラリン　トンカラリン
そうしているうちに、家の前の柿の木さ鳥ぁ来て止まったど。そしてその鳥さえずっどこ、おじいさんが聞いでいっど、

瓜姫子の機さ、
天邪鬼ぁ　ぶんのって
キーコン　パテン
て言うごんだど。「なえだ、妙な音するな、妙な音するな」て、また耳すまして聞いでいっど、
瓜姫子の機さ、
天邪鬼ぁ　ぶんのった
キーコン　パテン
て鳴くずも。
「あれれ、なえだ、あれ」
おじいさんが今度、やにわに表さ出はって、そこら見たところぁ、何と無残にも瓜姫子は殺さっで椽の下にいたけずも。
「いや、この畜生、ほに」
て言うけぁ、おじいさんがごしゃえで、天邪鬼どこ、ひっつかまえで、仇討ち

だていうわけで、天邪鬼のどこ、とうとう殺してしまったど。そして裏の野原さ持って行って、天邪鬼をぶん投げだら、天邪鬼の血ぁ、そこらさこぼっで、萱の根っこなど赤くなったのは、そのためだど。とーびんと。

3　くいごこむかし

むかしあったけど。
おじいさんとおばぁさんがいだっけど。
あるとき、おばぁさんが川端さ洗濯に行ったところぁ、向うから赤い小箱と白い小箱と流っで来たど。と、おばぁさんは、

赤い小箱　こっちゃ来い　白い小箱そっちゃ行げ
赤い小箱　こっちゃ来い　白い小箱そっちゃ行げ
赤い小箱　こっちゃ来い　こっちゃ来い

て、小箱拾って来たど。そうして家さ来て、その赤い小箱開けてみたところぁ、中から、くいごこぁ出てきたど。

「あらららら、これぁめんごいくいごこだ。おじいちゃん、ほんじゃこのくいごこ育てんべねぇ」

なて、そうしておじいちゃんと二人でくいごこ、大変かわいがっているうちに、くいごこはだんだんと大きくなってよ、体も大きくなって、力も強くなって、ある時、くいごこは、

じじものれ　クェンクェンクェン
ばばものれ　クェンクェンクェン
じじものれ　クェンクェンクェン
ばばものれ　クェンクェンクェン

て言うずも。「なえだごど」て聞くじど、また、

じじものれ　クェンクェンクェン
ばばものれ　クェンクェンクェン

て言うもんだから、
「なえだごど、のれて言うのだどれ」
て、おじいさんとおばぁさんが、
「なぇだ、くいごこ。お前、ほげな、おらだ二人のせられんなが」
じじものれ　クェンクェンクェン
ばばものれ　クェンクェンクェン
カマスもつけろ　クェンクェンクェン
て言うごんだずも。
「ほだか、ほだか」なて、おじいさんとおばぁさんがのって、カマスをつけて、それから鍬もつけろなて言うもんだから、鍬もつけてのったところが、くいごこはトコトコ、トコトコと歩き出して、だんだんと山さ行ったど。
山の方さ行って、そこでくいごこは止まってよ、
ここ掘れ　クェンクェンクェン
ここ掘れ　クェンクェンクェン

て言うごんだど。ほうすっど、おじいさんとおばぁさんとそこさ降ちて、掘ってみたところが、何とその土の中から大判だの小判だの、宝ものだの出てきたずも。

「いやいや、こりゃ大したもんだ、こりゃ」

なて喜んで、おじいさんもおばぁさんもはぁ、カマスさ入っで、こんどはくいごこはまた、

じじものれ　クェンクェンクェン
ばばものれ　クェンクェンクェン
カマスもつけろ　クェンクェンクェン

て言うもんだから、くいごこさのって、カマスもつけて家さ来たど。ほうしてまず炉端さもってきて、カマスあけて眺めっだどこさ、隣のばっちゃ、火もらいに来た。

「火一つ、呉(け)てけらっしゃい、まず」

なて、ガラッと戸開けて入って来たらば、カマスから宝ものだの、大判小判な

ど出して、そうして眺めっだもんだから、
「なえだまず、こっちの家ではまず、どっからもって来らったなだ。まずこのいっぱい、ええごんだごで。こりゃ」
なて。
「いやな、実はこういうわけで、くいごこに教えらって掘ったところぁ、こういうものいっぱい出てきたど、これ」
て言うもんだから、その隣のばっちゃが、
「ほんじゃ、おれもくいごこ借って行って、掘んなね」
なて言うけずぁ、火もらいしったのもやめてよはぁ、ほうしてテンテンと家さ行ってしまった。ほうして今度、おじいさん連れて来て、
「くいごこ、貸せ」
ていうもんだ。「貸さんね、貸さんね」て言うげんども聞かねでは、くいごこ引っぱって行ったごんだど。ほうしてのれとも言ねなさのって、掘れとも言ねなさ掘ったもんだから、その隣の欲ばりじいさん、ばぁさんが掘ったどこさは宝ものも大

判小判もさっぱり出ねで、馬の糞だの、ほげなものばり出てきたんだど、ほうすっど、

「この畜生、ほに、ごしゃっぱらやげる」

なて、ねっから借って来たくいごこはぁ、殺してしまったんだど。ほうしてこんど、おじいちゃんもおばぁちゃんも、なんぼ待ちても、くいごこ連(せ)て来ねもんだから、

「なえだべ、こりゃ。行ってみて来(こ)んなね」

なて、隣の家さ行ってみたところぁ、可哀そうに、くいごこ殺さっでいだんだけどはぁ。

「いやいや、こりゃむごさい、ほに、せめてほんじゃくいごこの死骸もらって行かんなね」

なて、おじいさんが泣き泣きそのくいごこ背負って来てよ、ほして、家の前さお墓に葬ったど。そして花を植えたり、線香立てたり、松の木一本植えだどこだど。そうしったところぁ、その松の木だんだんと大きくなって、太くなって、大

きな木になったごんだど。と、おじいさんは、
「いや、こがえに大きくなった。こりゃ。はてな、こいつでひとつ、臼でもこさうがな」
なて、こんど松の木伐り倒して、おじいさんが臼彫ったごんだど。そうして、おじいさんとおばぁさんと二人で餅搗いたど。
ほうしたところが、餅の中から大判だの小判だの宝ものだの、いっぱい出たごんだど。
「おやおや、こりゃ、またすばらしい、すばらしい」
なて魂消てよ、その宝もの眺めていたところさ、また隣のばぁさんが来たごんだけど。その大判小判、宝ものながめて、また家さ行っておじいさんどこ連(せ)て来てよ、こんど、
「臼貸せ」なて、
「いや、こんどは貸さんねぞはぁ、貸さんねて、貸さんねて」
て言うげんども聞かねで、その臼もって行って、家さ行って、隣のじじとばば

で餅搗いてみたげんども、大判小判どころか、何にも出ねがった。
またこんど、「うん、ほに…」なて、ごせやえで、その臼はぁ、
「こつけなもの、割ってしまえ」
て、ほうして木割り斧で割ってしまったどはぁ。そうしてムチャクチャにしてカマさくべて焼いてしまったはぁ。
こっちはおじいさんとおばぁさんが、なんぼ経(もよ)っても臼もって来ねもんだから、また行ってみたところが、
「あんげな臼、焚いてしまったはぁ」
「なえて言うごんだごど。まず、ほだから貸さんねて言うたに、ほに、聞かないで。ほんじゃせめてその臼焚いた灰ばりも、もらって行かんなね」
なて、おじいさんが泣き泣きその灰さらって、笊さ入って持って来たど。そうして家さ持って来て、
「こんど肥料(こやし)でもすんなねごではぁ」
なて、木さその灰かけたところぁ、不思議にも美しい花咲いだごんだど。

「あらららら、こりゃまず、なえだまず、節でもない今頃、花など咲いた。なえていうごんだべ、まず」

こんど今一本の木さかけてみたところ、またその木もパッとみごとに花咲いだ。

「いや、これはすばらしいもんだ、こりゃ。いざこがえに珍らしいこと、こりゃ。お殿さまでもお目にかけんなねごで」

なて、そうして何日何日（いつかいつか）と思って待ってだどころが、そのうちに殿さまのお通りあったど。そうすっどおじいさんが、

「枯木さでも何さでも花咲かせて進ぜ申すから、どうか御覧になっておくやい」

て、殿さまの家来の人さお願いしたところが、

「そんなものあっこんだれば、見せてみろ」

て言わっだもんだから、おじいさんがこんどは大きな木さ登って、灰の入ったそのカゴをかかえて、

綾はチュウチュウ　黄金ザラザラ

チチンポン　パラリン

綾はチュウチュウ　黄金ザラザラ
チチンポン　パラリン
て声をかけて、その笊の灰をパッとまいたところが、花咲く節でもないのに、いや、それはそれは、見事な花が咲いたど。いや殿さまもお伴の人も、
「いや、これはすばらしいもんだ。いや、みごとなもんだ。何とすばらしいもんだ」
て言うもんで、大変に感心してお賞めになって、そのおじいさんは御殿さ招(よ)ばっで、御褒美をもらった。こんどはその話を聞きつけて、
「よし、おれも一つ御褒美もらって呉ましょう」
て、こう思ったど。そうして今度は残ってだ灰かきあつめて、御殿さ行って、
「花咲かじじいが参り申したから、どうかまた見ておくやい」
て言うたど。
「いや、この前のは、なかなかみごとだった。ほんじゃまた咲かせてみろ」
て、殿さまがおっしゃったもんだから、そのおじいさんは御殿の庭さ廻って木

さ登り、その灰をいきなりつかんでふりかけてみた。花どころか蕾一つ出なかった。

「いや、こげな筈はないわけだ」

て思って、そのじじは一生懸命で灰ありだけ、力まかせにぶちまいたもんだから、なぁに花などさっぱり咲かねでお伴の人だの、殿さまだのの着物さも顔さも灰ただかかったど。いや、こんどはお伴の人はごせやいて、

「これは、にせものだ」

ほうして、おじいさんがすぐにそこで押えらって、御褒美どころか、かえってお叱りを受けてよ、さんざんな目に合って帰って来たど。

んだから人真似したってわかんねもんだ。とーびんと。

4　いたちとねずみ

むかしあったど。

いたちは河原さ畑作って、そうして粟蒔いたど。草刈ったり、草とったり、いろいろ手入れをして、粟育てたど。そうして秋になったば、すばらしい立派な穂が出て、そうして見事な粟畑になったど。

「いや、こんじゃ近いうちに、こりゃ、刈って呉んなねなぁ」

て思って、楽しみにして、ある時、刈ってもええと思って行ってみたれば、その粟一本もないごんだど。

「なえだこりゃ、おかしいごんだ、誰だ、こりゃ刈って行ったな」

て思って、そうして不思議で仕様ないもんだから、見っだれば、からすは止まっていたけど。からすに聞いだど。

からすどの　からすどの
越前河原に　粟蒔いた　キチキチ

お前　取りやったか　取りやんねが　キチキチ
からすは、「おら知らねぇ、カァカァ」て行ってしまった。
「はて、こりゃ誰に聞いたらええんだか」て。雀はいた。
雀どの　雀どの
越前河原さ粟蒔いた　キチキチ
お前　取りやったか　取りやんねが　キチキチ
いたち聞いた。
「おら知しゃねなぁ、ちゅんちゅん」
て飛んで行ってしまった。
「はて、からすも雀も知しゃね」
ほうしているうちに、目の前さ、ねずみはチョロチョロと出はって来たど。粟畑さよ。
ねずみどの　ねずみどの
越前河原さ粟蒔いた　キチキチ

お前　取りやったか　取りやんねが　キチキチ

て聞いた。ほうしたら、ねずみも、

「おれぁ取んね、チュウチュウ」「ねずみも取んねが」て思って、不思議にしていたところぁ、ねずみの子はチョロチョロと出はって来た。

「おかちゃん、ゆんべの粟餅、また食だい」

て言うたど。そうすっど、

「ほりゃ、ねずみだでそ」

いたちは、こんど、ねずみどこ捕えて皮むいて食ってしまった。それからねずみ見っど、目の仇（かたき）にしていた。んだから、いたちはねずみば取って食うんだど。

とーびんと。

5　牛方と山姥

むかしあったけど。

あるところに牛追いいだっけど。牛追いざぁ、遠かいどっからいろいろな荷物を牛の背中さつけて、そうして運んで来て、駄賃をもらって暮している人だごでな。むかしは今とちがって、道だって細いんだし、そうして町から町の間だって山あり野原あり、なかなか容易なもんでないがったんだな、ありゃ。

その牛追いは、ある時、遠かい町まで頼まって荷物運びに行った。そうしてつけて来たものは干魚（からがい）だど。そうして、

「こりゃ、随分遠かいどこだ、こりゃ。いまと早く帰られっかと思ったげんども、こりゃ、帰りは遅くなるようだ、こりゃ」

て、気もんで、一生懸命で牛の尻叩っけんども、大きな牛はいっぱい荷物つけたもんだから、なかなか、モソラモソラと涎たらして歩くなだから、はか行かね。

そうこうしているうちにはぁ、ねっから山の上ではあ、とっぷり暗くなってし

まった。
「なえだって、こりゃまず、徒然（とぜん）のとこで野宿もさんねんだし、仕方ないから、なんぼ遅くなったって行かんなねごで、なえだかさぶしえようなどこだ」
　て思いながら、牛の尻を叩きながら来たどころぁ、とっぷり暗くなって、
「こげなところでつまらねぇものなど、化物など出ぁしまいか」
　て考え考えきたところが、だんだん山下って野原の真中まで来たらば、向うの方から、何か追っかけて来た。ほうして、だんだん、だんだん近間さ来た。耳すまして聞いていっど、
「牛追い、干魚一本呉ろ」
　て、音する。
「いや、こりゃ困った。こりゃ何か化けものみたいなものに追っかけらっだ。こりゃ」牛追いはサワサワ、サワサワて、まず寒気立ちしながら、牛の尻叩き叩き一生懸命でいそがせっけんども、牛などそんなこと知ったもんでないんだしねぇ、ノソラノソラと来るばりなんだし、そうしているうちに丁度うしろさ追っかけて

来た。

「牛追い、干魚一本呉ろ」

いや、そのさぶしえじだが、おっかないじだか、仕方なくてはぁ、牛追いは牛の背中から干魚一本抜いで、「ほら！」て、投げてやって呉だ。ほうしたれば、うしろでガリガリ、ガリガリ、干物をかじる音して、たちまち食ってしまった。ほうして食い上げっど、また追っかけて来っずも。

「牛追い、干魚一本呉ろ」

「はて、ほに」

て思って、かかられるような気持もすんだし、仕方なくて、また一本、「ほら」て投げてやった。と、またその干魚、ガリモリ、ガリモリと食ってしまって、またこんどは、

「牛追い、干魚一本呉ろ」

ほうしてはぁ、とうとうみな干魚呉でしまった。後はないはずだごではぁ。ほしたれば今度はまたうしろまで追っかけて来て、

「牛追い、その牛を呉ろ」
「いや、こりゃ困ったもんだ。まず、とにかく、おれは命取らってはいらんねんだし、大事な牛ではあっけんど、仕方ないからはぁ、その牛はぁ、追っかけて来たものさ呉っか」
　て、牛、追っ放してよはぁ、テンテン、テンテンと逃げて来たけどはぁ。そうしてこっちまで来たどころぁ、そこに一軒のアバラヤあっけど。
「いや、これは天の助けだ。ここでまず、今日は隠って通すべ」
　て思って、そのアバラヤさ入った。そうして安態していた勘定しったところぁ、その化けもの、牛をみな食ってしまってよはぁ、「ああー」なて来たような音すんだし、
「いや、これはしたり」
　て思って、まず、牛追いはワラワラと梁の上さあがっていだ。ほうしたら、その化けもの、入って来た。
「いや、今日はええがった。まず、干魚腹くっちぐ食ったんだし、うん、こがえ

な時はこりゃ…、ほだげんどな、まず餅でも焙って、いまちいと食ってもええようだ、こりゃ」

なて、こんどは火焚いて腹あぶりしながら餅焙り始めた。ほうして化けものは腹あぶりして、ええっ頃温まったもんだから、コクリコクリと居眠りはじめた。

「いや、こりゃ眠ぶかけしたな」

て思って、牛追いは、

「まず、今日は昼飯（ちゅうはん）は食ったげんども、夜飯も食ねんだし、夜になって寒いげんども食うものもない。仕方なくてやっとすっと来たずだげんども、自分も腹も減ったし、よし一つ今度はおれはあの餅食って呉る」

て思って、屋根抜いて、萱棒つるつる、つるつるとやって、チョクッと餅のやっこいなさ刺して、たぐりよせて食った。ほうしてその化けものは眠ぶかけしてるうちに、一つ食い二つ食いしてるうちに、ぺろっとみな食ってしまった。ほうしてるうちに目覚ました。

「あっ、餅さっぱりなくなった、こりゃ。なえだこりゃ。なえだ火の神さまでも

食ったが、こりゃ」

なて。

「こんじゃ、餅よりも甘酒でも温めてのむか」

なて言うけざぁ、大きなカン鍋かけて、そうして甘酒温(あた)めはじめた。

また、こんどコクリコクリと眠ぶかけ始めた。と、牛追いは天井にいて、こんどは、「甘酒一つ、おれぁ飲んで呉れんべ」と思って、またツルツル、ツルツルと葭(よし)棒の長いな、上から落してよこした。そしてツツウ、ツツウと吸い上げて、つるっとみな飲んでしまったど。そうしてるうちに、こんどはその化けものが目覚まして、

「あっ、こんどは甘酒、火の神さま、みなのんでしまった、こりゃ。いや、今日はまず、腹もくっちくなったんだし、ええごではぁ、たくさんにして寝んべはぁ」

なて、

「おれは、木の唐戸さ入って寝たらええんだか、石の唐戸さ入って寝たらええんだか、どっちさ入って寝たらええんだか」

なて居る。そうすっど牛追いは上にいて、「木の唐戸ええがんべ」て言うたど。
「ほう、ほんじゃ、火の神さま、おれは木の唐戸ええていうから、木の唐戸さ入って寝っかぁ」
て、傍にあった木の唐戸、ばぁっと蓋をあけて中さ入ってはぁ、ぐうぐう眠てしまった。
「ああ、まず、こりゃええあんばいだ」
て思って、こんどは牛追いは、梁の上からするすると降りて来て、さっきの甘酒温ためたカン鍋さ、お湯わかしたずも。そしてそこにあった火箸で、焼いて木の唐戸の蓋の上っかわさ穴あけた。そして牛追いは蓋の上さのって、その穴から煮立つ湯、ちょうちょうと入っでやった。そうしたところぁ、中で、
「あちちち、あやまった、あやまった」
て、音すっこんだど。そうしてこんどはそんでも天井さ、びったとのっかっているんだし、蓋あけらんねで、また煮立つ湯わかして、その穴から入っでやった。こんどは音しねぐなった。ほうしているうちに、だんだん明るくなった。こんど

は牛追いは大丈夫だと思って、木の唐戸の蓋あけたところぁ、中にキノコの大きな入っていたけど。キノコの化けものだったど。とーびんと。

6　きつねとかおす

むかしあったけど。

あるところに、きつねとかおすどいだっけど。そうして、かおすはきつねどこさ、

「晩げ、おら家さ遊びに来ねが、雑魚いっぱい獲ったから、御馳走すっから、おら家さ来い」

「ほだが、ほんじゃ行くべ」

て、きつねは喜んで行ったど。そうしたれば、いや、あるにも御馳走はみな雑魚、おままは雑魚、お汁も雑魚、お皿も雑魚、おひらも雑魚、いやそのうまいこ

と。きつねは鼻ふかふかていわせて、片っぱしから平らげだど。
「いや、うまがった、うまがった。かおす。こがえなうまい雑魚、なじょすっど獲られるんだい」
て、きつねは聞いたど。ほうすっどかおすはにこにこて笑いながら教えたど。
「あのな、きつね、こうすんなよ。寒じる晩によ、川原さ行って、尻尾を川端さ浸たしておくのよ、そうすっど、その尻尾さ雑魚はみなゴチャゴチャとついて、集まって来っから、そん時、尻尾を引っとり上げっどいうど、いっぱい雑魚とれっこで」
て、教えたど。
「やぁ、ほんじゃ、おれも行ってとって来んなね」
ていうわけで、狐はこんど川原さ行ったど。ほうしたところぁ、その晩げは寒じる晩げで、ビリビリ、ビリビリと感じて来たずも。だんだん夜更っど感じて来て、
「いや、こりゃええあんばいだ。今日は一つ、なんぼいっぱい獲れんだか、一つ、

かおすに聞いた通りやってみっから」
　ていうわけで、きつねは太い尻尾、川さボジャンと入って、ほうしてツクンとして待っていたど。そうすっど今度は、お星さまはきらきらと輝いて寒い風は吹いて、いや寒じるわ、寒じるわ、そうしているうちに、ビリビリ、ビリビリと氷張って、川さ、
「大変、こりゃええあんばいだ。一つ、ここらで引張ってみっか」
　きつねはちいと尻尾引張って見たど。ほうしたれば、何だかくっついて、ちょっと上がって来ねがった。
「いや、こりゃ、なんぼ雑魚くっついだんだか、まず、いまちいといっぱいくっつけて獲んべ」
　なて、きつねはそのまま寒いげんど我慢していたど。
　ほうしてこんど、うすら明るくなるまで待ちでから、こんどはなんぼいっぱいこりゃ、喰っついたがと思って、尻尾を引張ってみたところぁ、なかなか上がって来ねずも。

「いや、こりゃ、ええあんばいだ。まず、こりゃ雑魚なんぼいっぱいくっついだんだか、うん、大したもんだ」

て、引張ってみっけんども、なして、上がって来ないじだ。凍みてしまったんだから、雑魚くっついたと思って、ほりゃ。きつねは一生懸命で引張ったど。なんぼ引張っても上がって来ねずも。

少々の小雑魚　落ちても大事ぁない　大事ぁない　大事ぁない
少々の小雑魚　落ちても大事ぁない　大事ぁない　大事ぁない

て、一生懸命で引張っけんども、上がって来ねずだ。ほうしてるうちにはぁ、今度はだんだん明るくなって来た。

「いや、こりゃ、明るくなった。こりゃ、明るくなって誰か人など来っどおっかない。」

少々の小雑魚　落ちても大事ぁない　大事ぁない　大事ぁない
少々の小雑魚　落ちても大事ぁない　大事ぁない　大事ぁない

きつねはまず一生懸命で引張っずも。そうしているうちに明るくなって、テカ

テカお天道さまなど出かかって来たもんだから、そのうちに子どもら川原さ遊びにきた。

「あらら、あそこに何かいたぞ」

なて言うずも。と、きつねはこんど気ぁもめで、そうして、

「行ってみろ、行ってみろ」

なて、子どもら言うもんだから、ますますきつねはあせって、エンヤラサ、エンヤラサと引張ったずも。そうして引張った、引張ったもんだから、尻尾は尻からスポーンと取ってよはぁ、尻尾なしになって、きつねはかんから、かんからと逃げて行ったどはぁ。

きつねはときどき、他のけものなど騙したり、かおすどこなど騙したりしたもんだから、とうとうかおすに仇取らっだんだど。んだから人騙したりさんねぞ。お前もだもなぁ。とーびんと。

7　浅立の蛇

白鷹町浅立のお諏訪さまの鎮守さまは、蛇の神さまで、蛇頭（じゃがしら）の獅子舞いが残っている。

浅立では肥塚をモサクサとして、蛇がかまれるように肥塚を積めと言うたもんだ。こういうわけで、モチャクチャと積んで、そうして堆肥の熱よくって入ってる蛇を保護したもんだど。

んだから、春に蛇が肥塚から退散してから、堆肥を運ぶということにして、ずうっと冬うちは肥挽きはしなかったもんだ。

8　角力とりときつね

むかし、九平という若者いだったど。こいつぁなかなか体格もええくて、力も

あって、よくお祭りの村角力さなど出て行って、そして勝って、褒美もらって帰るという男だったど。

ある時、九平は、隣の村のお祭りさ出かけて行って、そこで角力をとって、やっぱり優勝して、そして御褒美をもらって、そん時は大変にみんなに賞めらっで、

「一杯飲んで行ぐどええごで」

なて、それから酒など御馳走になって、それから夜遅く、フラリフラリて、ほろ酔いになって、大変ええ気持で帰って来た。ほうして野原の真中まで来たところぁ、ひょっこりとそこさ、見たこともないような若者が立ってだ。ほうして、

「九平、九平、おれと角力すねが」

て言うごんだど。九平は、

「はてな、こげなどこに、こげな若者いたべか」

て、よく考えてみっけんども、なかなか思いつかね。

「いや、こりゃひょっとすっど、何か何だぞ」

て、こういう九平は勘ぐりしたど。そうして、

「あまりええがんべ、角力すんべ、その代り、只はさんね。おれは今日、こっちのお祭りさ行って、この通り御褒美もらって来た。こいつを賭ける。お前は、ほんじゃ、何賭ける」

こうやって見た。

「ああ、そうか、いや、九平、実はおれ何も持たね」

「何も持たねでは角力になんね。何でもええから一番大事なもの賭けろ」

「いや、そう言われっど、実は宝生の玉もってだ」

「よし、ほんじゃ、その宝生の玉賭けろ。お前負けたときは、おれはその宝生の玉もらう。おれぁ負けたときは、おれぁもらってきた褒美みなやっから」

そこでよかろうというわけで、こんど角力になったど。んで、九平は着物脱いで、シコを踏んでかまえた。そして気合いを入っで両方立ち上がって、そうして四つにとっくんだ。とっくんだところが九平もなかなか心配になった。

なんぼ、なじょしても動かね、押しても動かねし、また脇さも動かね。

「いや、悪くすっど、おれ負ける、こりゃ」

心配になった。
「んだげんど、こがえに強いな、ここらにいたべか」
そこでちょっと九平も考えた。
「ははぁ、さっき、おれも妙な勘ぐりをしたげんども、こりゃ当たりだぞ。前さ押してもびくともしねぇな、こりゃ狐のしわざだ。ちくしょう、うしろの尻尾でふんばってきずがんのだ」
そりゃ、こう、九平は思った。「よし、読めた」というわけで、九平はいろいろ揉み方して、そっちゃやり、こっちゃやりして揉んでいた。そうして隙を見て、ぐっと前さ引いた。そうしたところは、その男はあっけなく前さのめってしまった。そうして九平の勝となった。そうすっど九平は、
「さぁ、悪れげんど、おれぁ勝った。さっきのその約束通り、宝生の玉もらって行んから、出してもらいたい」
て、はぁ、その相手の若者は仕方なくて、しぶしぶその宝生の玉出したど。それで九平はその宝生の玉を持って、さっきもらった御褒美と共に持(たが)って家さ帰っ

て来たど。その日はそれで終ったげんども、それから二・三日経って、夜中になったら、九平の寝てる寝床の雨戸のかげさ誰か来た。

「九平、宝生の玉よこせ、宝生の玉よこせ」

九平は、

「ああ、来たでこ」

て思ったげんども、すぐにはやる気はなかったし、九平も黙っていた。

その次の晩げも、その次の晩げも来て同じこと言うど。

「何だ、こりゃ」

て思って、九平はそっとその窓の孔から見たところが、きつねは尻尾を雨戸の腰板さこすりつけっど、「九平、宝生の玉よこせ」と聞こえんのだど。

「やぁ、こんではたまったもんでない。毎晩げ、これやられたら、おれもはぁ、お手上げだ」

と、九平は、

「あまりええ、たしかにお前の大事なもんだべから、返す。明日の明け方に、う

しろの堀の芋の葉さ、その品物のせて流してやっから、そいつをお前もって行けば、ええごでの」

こういう風に約束して、次の朝暗いうちに用意しった芋の葉さ玉をのせて流してやった。そしてこんど夜明けてから見たら、芋の葉はあっけんども、玉はないがった。その次の晩から、そういうものは来なぐなったど。とーびんと。

9　旅人と化けもの（三枚のお札）

むかし、あるところに、大変にお観音さまを信仰している人があったど。

その人は非常に大事な用事ができて、遠かいところさ出かけんなねぐなった。んで、なかなか忙がしい仕事であったと見えて、すぐに引っ返して来んなね。んだげんども昔は、そんがえな、すぐ引っ返して来んなねったて、二時間、三時間で引返して来られるもんでないんだし、しかもそれぁ野原や山や、そういうとこ

さびしいどこも通って来んなね。そんで出かける前にお観音さまさお詣りして、お観音さまから、お札を三枚ちょうだいして、懐さ入って行ったど。道もまた細くて悪いんだし、ほうしてどうやら早めに、まず用達しを終って帰り道になって来たげんども、やっぱり晩方になってしまった。そうして何だか心細くなって来たげんども、なかなか遠い道だもんだから、急いで来ても暗くなった。そうしてさびしい野原さ通りかかったところが、向うから、

「旅人、ちょっこら待て」

ていうような、哀れっぽい、いやなひびきのある呼び声に呼びとめらっだ。

「いや、困った。こりゃ、何か出たぞ、こりゃ」

て思ったげんども、また呼び声が高く近くなった。仕方なくて、旅人はお観音さまにおすがりする他ないと思って、お札を一枚出して、

「大山でろ！」

て言うて、そのお札を投げ上げたところぁ、大きな山できた。この時だと思って旅人は一生懸命になって走って来たげんども、後から追っかけて来る化けもの

みたいなものが、また丁度うしろまで来た。今にも、うしろから抑えられるような近くになったもんだから、旅人、またこんど、いま一枚、お観音さまのお札を出して、

「大川でろ」

て言うて、いま一枚、お札をなげ上げたところが、こんどはドンドンと流れる大きな川でた。まずよかったと思って、一生懸命で急いで来たげんども、うしろの方からその川もガホガホと漕いで、たちまちに追いかけて来た。

こんどはまた捕まりそうになったもんだから、その旅人は仕方ないから、まず最後の一枚と思って、こんどはいま一枚、ふところから出して、

「大火事でろ」

て、そのお札をお空に向って投げ上げたところぁ、そこいら一面が火の海になった。

「いや、これは今のうちだ」

て思って一生懸命で逃げた。そうしてしばらくたって、こっちゃ来たところが、

そこにあまり大きくないげんども、神さまを祀った祠（ほこら）があった。おそるおそる中を見たところが、なに仕合せじなんだか、お観音さまがそこさ立ってござった。そうしてお観音さまに、

「どうか、助けて下さい」

ていうもんだから、お観音さまは、

「おれのうしろさ隠っでろ」

そう言っておぐやったもんだから、喜んでそのお観音さまのうしろさ隠っだ。ほうしてやれやれと思っていたところが、さっきの化けものが、そこの祠の前さ来たど。こんどは、

「おお、今日はわかんねがった。まず、旅人には逃げられっし、こげなごしゃげっどき、まず、ドブロクでも飲んで休むべ」

て、こんどはカン鍋かけて、火など焚いて、どっから出したんだか、ドブロクあためた。そうして、そのドブロクをたちまちのうちにはぁ、飲んでしまった。

「ああ、まず、今日はこれで仕方ないから、ねるはぁ、今日は石の唐戸ぁええべ

か、木の唐戸ぁえええんだか」
て言うたど。そしたらお観音さま、
「今日は石の唐戸ぁええ」
て言うておぐやった。
「ああ、ほうか。ほんじゃ、石の唐戸さ入って…」
て、化けものは石の唐戸さ入って、ドダンと蓋をして眠ってしまった。と、お観音さま、
「さぁ、出てこい」
て、おっしゃったもんだから、出てきて、そしてお観音さまの言われるとおり、カン鍋にお湯わかして、石の唐戸の隙間から、その湯を入ってやったど。そうしたところぁ、化けものは音立てねぐなった。んで、お観音さまのおかげで助かったというので、「オカゲサマ」というのだど。とーびんと。

10　笠地蔵

むかしあったけど。

あるところに、大変正直なおじいさんとおばぁさん、暮してござったど。

そこは山の中なもんだから、おじいさんは山のワラビだの、ゼンマイだの、そんなもの採って、そうして町さ売って、細々と暮していたなだけど。

ある時、わずかばかりの干物をもって、おじいさんが町さ出かけた。そうしてまず丁度お年とりの近くになったもんだから、お魚だの、それからいろいろ正月の御馳走など少しばり買って帰んべと思ったところが、何だか空模様があやしくなって、ポツリポツリと雨が降って来た。

「いや、こんじゃ、おれは帰り道もそう近くもないんだし、何か雨具の一つも買って行くべ」

て思って財布を見たところが、ほんの少しばかり、小銭が残っていたど。

んで、おじいさんはその小銭を全部はたいて、そうして蓑帽子を一枚買ったど。

そしてそれをかぶって家さ帰り足になった。そしてだんだんと来て、村境まで来たところが、そこにお地蔵さま立ってござったど。だんだん雨も本降りになって来て、地蔵さまが頭からびしょぬれになって立ってござった。おじいさんは地蔵さまを大変信仰してござったもんだから、

「いや、これではもったいない」

その本降りの雨の中ではあっけんども、おじいさんはその蓑帽子を脱いでお地蔵さまさ着せ申した。ほうして自分が雨にぬれながら、家さ帰ってきた。

「ばぁさん、いま来た」

「ああ、帰ってござったか、大変だったな。あらら、なえだまず、そがえにぬって、じじちゃん」

「ほだず」

「なして、そがえ…。何か傘とか何か買って来たらええがったべした」

「いや、ばばよ、実はこれこれだ。買って来た蓑帽子だげんど、地蔵さまさ着せ申しておれは帰ったどこだ」

「おやおや、それはええごどしやった。そうだったか、早く家さ入って、そのぬっだ着物を脱がっしゃい」

ほうしておばぁさんが火を焚いて、おじいさんを温めて、別の着物と仕換えてもらったど。して、その晩はまず粗相なまかないで晩飯をすごして、じいさんとばぁさんは間もなく休んだど。そうして真夜中になったところが、何か異様な物音がしてきた。

しかも、その物音がだんだんと手前の方に聞えるようになった。よっく聞くど、

「じじ家どこだ、ばば家どこだ」

「なんだべ、こ、じじ家どこだ、ばば家どこだって言うてる」

こんど、すぐ傍さ来て、「じじ家どこだ、ばば家どこだ、ああ、ここだ、ここだ」て、言う音したかと思うど、グラッと戸の口の戸が開いたような音がして、ドスンと何か置いたようなひびきがした。

「はて、おかしいこと、何だこりや、何だべ」

て思って、おそるおそる出て見たところが、何か包みものが置いてある。中を

ほどいてみたところが、米だの味噌だの、お魚だのが入っていた。
「はぁ、これは何だ。おじいさん。ほんじゃ、さっきのお地蔵さまの御利益でないべか」
て、おばぁさんが言うもんだから、おじいさんは夜明けっど、村境の地蔵さまのどこさ行ってみたところが、ちゃんとお地蔵さまはいつもの通り立ってござって、蓑帽子をかぶってござった。
「ああ、こりゃありがたいもんだ。お地蔵さまのおかげだ」
て思って、まず手を合せてお礼をいって帰った。それからおじいさんとおばぁさんは仕合せに一生終えることができたど。とーびんと。

第二部　米沢市六郷の昔話（二）

1　コロリの幽霊

関というじさまの話。

明治十二年、コロリ（コレラ）で何百人もの死体を埋めたところに、堤の方向けて小屋を建てた。夕方になって家に帰って来っど思ったら、見知らぬ婆がいる。

「はてな、どこの婆であった？」

て聞いたれば、「米沢だ」て言う。

「米沢なて、今頃、こりゃ、御苦労なごんだな」

と思っていたら、坂のむじり角まで来たら、その婆、見えなくなった。そんで和尚さまに頼んで拝んでもらった。

きっと、コロリが流行した時に、米沢中でバタバタ死ぬもんだから、棺桶がと

ても出来なくて、ここの山の天頂さ孔掘って、死人を裸にして埋めた。そいつの怨霊であんまいかと、供養して塔婆建てたど。

（嵐田勝見）

2　稲場の土ぐも

上奥田というところに、稲場という家がある。

そこの家で、ちょっと山手に畑があった。そしてそこさ、稲場家の嫁が毎朝、晩方、お汁の実とりに行かんなねわけだ。そうしてどうも刻限になっど、行くというのが、家の人、不思議に思ったわけだ。

ところが、ある晩方、行ったところが、すばらしいええ男がそこに待ってだて言うんだ。そして嫁が懐胎したていうわけだな。

その出た子どもがクモだったど。土グモを退治して、今、稲場の傍に祀ってた

のが、それだそうだ。

（嵐田勝見）

3　けらっぽ峠のきつね

米沢市口田沢と川西町玉庭の境に、けらっぽ峠というところある。

女は口田沢で、男は玉庭の堤（つつみ）下の者だったど。そいつが、狐は、二人の男女が会って話し合ってたのを見ていたわけだ。そんで男が来るとき、女に化けて待ってで、

「とにかく一緒にならんね。死ぬ他ない。死ぬには首吊りが一番ええ」

そういうことになって、そこの杉の木に二人で首吊ってしまった。ところが男の方は目方が重いもんだから、落ちてしまって命拾いしたが、狐の化けた女の方は目方が軽いがったもんだから、そのまんま首吊って死んでしまったど。

4　姥　　捨

（嵐田勝見）

むかしあったけど。

じじと息子はいだっけど。ところぁ、その息子は孝行息子だったど。ところが国の殿さま、

「年寄り六十二才になっど、穀つぶしだ。家さ置かねで山さ捨ててこい」

ていう触れ廻したど。そうすっど、孝行息子は、

「いや、こりゃ困ったこと出たもんだな」

て、何日か、まず悩んだんだな。やむを得ないもんだしはぁ、親父、山さ置いて来る他、手ないて、ヤキメシ少し握って持(たが)って、その親父を帯で背負って、そして山さ出かけて行ったんだな。そうすっど、ヤブやら漕ぎ立てて、西の方から

かまわず漕いで行ったら、背中に負ぶさって、親父は、ポキッ、ポキッて木を押折って…。

「なえだ。何でそがえ木など押折ってる」

て聞いたところが、

「お前、帰りに道わかんなぇぐなって帰らんねぐなっど悪いから、ずうっとわかるようにして行くなだ」

「いやいや、そうか」

なて、ずうっと西の方向いて、何里と行ったずだな。そしてきれいなどこさ行って、木などのどこにカラスなど鳴くし、死んだ人などいたりしたし、カラスは食ってだし、やたらに死んでいる。

親父を降ろして帯で落ちたりしないようにしてくれて、そしてまずヤキメシを呉って来たところが、木押折ったのを目当てして、かまわず家さもどって来たんだな。その息子も孝行息子なもんだから、とても夜眠ぶらんね。

「親父、ぶん投げて来たが、今なんとしったんだか」

て、眠るに眠らんね。こんど夜中に起きて、また山さ行ったど。ほうして飯(めし)与えて来たから、死にゃしなかった。それから親父背負って連(せ)て来たんだな。

こんど、役人がずうっと廻ってくる。それでいたりなんかすっど、とんでもない罰着んべし、何とかして呉れっかと考えた結果、穴倉さ入って隠しった。

ところぁ、代官所の命令で、灰で縄なって持って来いということになった。

「はて、灰で縄なってて、なじょなことするもんだか、こりゃ困ったもんだ」

て、穴倉さ行って、親父に聞いた。

「灰で縄なってもって来いという、なじょしたらええ」

「ああ、そんで、縄なったな、そくっと焼いてもって行くと、けっして崩さねでそっともって行げ」

て言う。

「ははぁ、なるほどな、これ持って行って…」

て、代官所さもって行ったど。

「なかなか考えたな、ほんじゃ」

こんど、二尺ばりの棒もって来て、「元、裏、どっちだか当てられっか」て、平らに削った棒出したそうだ。

「こりゃ困った。どっち裏だか元だかわかんね。今夜一晩、おれに考えらせてみておくやい」

て言うわけで、まずその日は引き取って来て、家さ来て、親父に聞いてみた。

「うん、そがえなものは、タライに水汲んで浮かしてみろ、そうすっど元はちいと沈むから、それで分がっこで」

「はぁ、こんじゃ」

て、次の日また行って言うたところが、また当った。

「はぁ、お前はなかなかの奴だな、何かあんでねぇか」

ということ聞がっだ。

「いや、何もない」

「何かお前一人の考えでないようだな」

今度は詮議さっだもんだから、ついには落ちたんだな。

「おれは、六十二才になる親父おったげんども、とっても山さ行って置いて来たものの、とっても眠らんねくて、また戻して来て、何とも仕様なくて、家の中さ隠しておいでで、その事聞いだんだ」

「はぁ、まず、それではお前、命なくなる」

なて言わっじゃごんだな。

「命なくなったて、おれはかまわね」

そしたら、代官ではそのこと殿さまさ教えだごんだな。そうすっど殿さま、

「いや、年寄りは、んだから粗末にさんね。それは大したもんだ」

て、遂にごほうびもらって、家さ帰ったど。それからじゃ、その土地の殿さまは年寄りを無沙汰にしないで置いっだったけど。とーびんと。

（遠藤　昇）

5　魚　女　房

三沢村（米沢市）に非常にねっか（けちんぼ）の人が、物がいたましいために、オカタも取んない一人子で暮して、非常に金を貯めっだ男がいだったど。だが食うものはうまいもの食いたいじし、道楽もなったし、そしてその男は城下に来て、買物して帰っどき、魚をとって、そいつをもて遊んでいた子どもがおったど。ところがそいつを、ちょっとその時に考えたところが、

「はて、こがえ小っちゃこい魚を取って、にさだ（お前たち）殺すごんだれば、むごさいごんだから、こいつ、おれさ売れ」

ということになって、その魚を川さ放したど。そしたら大変にその魚は喜んで、上の方さのぼった。

そのうち、その男は仕事をするために、頭の山へ行ったところが、ちょっとここら辺で見ない者が現われて、

「こっから米沢まで行ぐには、どう行ったらええがんべ」

「とにかく、晩方なもんだし、おれはここまで行んから一緒にあえべ」
と、こう言うて来たところが、その男の家さ来たところが暗くなった。
「これから暗くなって米沢さ行ぐにも大変だから、おら家さ泊って行げ」
と、こういうことになって、
「ほんじゃ、おれが料理して食せる」
ということ言わっじゃために、その男は、その女に夜飯たのんだというごんだ。
ところがすばらしくうまかった。そしてあがな料理上手だれば、
「おれは一人っこだ。まずおかたも取んないでいらんねし、おら家にしばらくいて呉れねが」
と、こういうこと頼んだれば、
「いや、おれも身より頼よりのない者だから、あまりええごんでない。居てなどもらえっこんだらば、ええどこでない」
こういうこと言って、そこの家さ住みついたわけだ。
ところがそこさ好奇心ができて、随分これは金も使わないし、小遣いも呉ろて

言わないから、なじょな料理するもんだか不思議だと考えていたもんだから、料理すっどこ見っだど。そしたところが腹さいて、腹から卵を出した。そして魂消て、

「こういうこと、おれは見て悪れということを言わっじゃんだげんども、見たところが、こういうわけだ」

と聞いたところが、

「それ見らっじゃごんだれば、おれは話する。実はおれはあなたに何年前に助けらっだ鮭の子だ。その恩返しに、人になって、あなたに恩返ししたどこだ。そんで見らっではこれっきりだから」

て、鬼面川（おもの）さ入った。それからというものは、鬼面川さ、マス、サケとか戻って来るようになったという話だ。その家は今も笹原にあるど。

（嵐田勝見）

6　黒　　滝

この地方は、八幡太郎義家が来て、戦いをしたところだ。その戦いのとき、ちょうど西の葉山にクキノミネというところあり、クキノミネの「クキ」というのは魚の「ハヤ」のことを言うのだ。あのような高いところさ、クキノミネというのは、八幡太郎が来たとき、舟で来たからであった。

そのとき、深山の黒滝明神があるが、荒砥を泥の海にしてくれると、大蛇が堰とめる。そしてこの辺は舟で通らんねがった。そんで、八幡太郎はそこまで舟で来て、桜の木を折って舟をつないだ。行ってみたら、大きな木だ。こいつが元は細くて逆さまに元が細がった。そしてその川のところを切って水を通した。それで深山の方は頭、荒砥の方は尻尾だった。そこに黒滝明神を祀ったわけだ。その黒滝は米沢まで流れの音がきこえるど。そして西方の黒滝明神に今も蛇がいっぱいいる。

（嵐田勝見）

7　むじなむかし

むかしあったけど。

あるところに、むじないだっけど。高安の沢さ、毎日のように殿さま行列あって、そこらの人ぁ毎日土下座していんなねし、御馳走でもしねげば、これもおんつぁっだり、殺さっだりするから、何ともいたし方なくて、それからそこの人ぁ、お庄屋なんていう人いて、

「いや、とてもわかんね、毎日殿さま来る。ただで置かんねし、御馳走さんなねし」

そういうわけで、だんだん考えたど。

「あっけな、殿さまでない。何か化けるんだ。ここらにぁ、むじなざぁいた。それにちがいない」

そしてこんど、

「むじな、それなど退治するにや、何として呉(く)っじゃらええがんべ」

こんど考えた上、

「犬に殺させるしかない」

て、みんなで評判したんだな。ところで犬なんざぁ居ね。はて何として、と、殿さまに願って、土佐から土佐犬もって来てもらうように話したんだな。土佐から太郎坊と次郎坊という男犬と女犬借りて来たど。太郎坊ていうのは男犬で、次郎坊ていうのは女犬だ。その二匹の犬を連(せ)てきて、そうすっどまた行列、トントンとやって来る。

それから、高安では立派な倉さ案内して御馳走して、そこさ酒肴を出して、みんなお膳ならべて来て、逃げてきた。それから酒盛り始まったのを見て、犬を口から入っでやってから、バェンと錠かったど。ほうしたところぁ、その音というのは外まで聞えて来たという。静かになったんで錠あけて見たところぁ、むじなと犬ぁ死んでしまったけど。男犬ぁ殺さっだ。そして金網ぶん抜いて、むじなの大将逃げてしまったど。

それから村人は心配して、その犬は立派に葬って、そこさ石塔立ててやったん

だな。ところがだんだん後に、むじなの孔、むじなの平など見つけて、犬は一匹死んでしまったし、女犬がその後、子が出てふえて今に伝わるんだど。

男犬の宮が今もある。その犬は水かきがあったもんだど。

（遠藤　昇）

8　佐兵ばなし

佐兵というもんは、

「いやぁ、あついから助けて呉ろ」

て、冬の大吹のとき、音立てるていうんだな。なんだって、この大吹きに、あついざぁなじょなごんだべと思って、助けてくろ、助けてくろと言うもんだから出て見たど。そしたば、何だか向うの方に薄黒いの見えっから行って見たところが、佐兵は堀さ入って、

「なんだ、あついから助けてくろざぁ、なじよなごんだ」
て言うたところぁ、カイロ抱いたまんまひっくら返っていた。ところぁカイロの灰ぁみな落ちて、ふところの中いぶりついたもんだから、
「佐兵、助けてくろざぁ、そういうことか」
て言うたど。

（斉藤捷太郎）

9　角力の話

代々、三十郎というじじは、人並より小さかったんだな。体格はな。小さいときから、みんなに馬鹿にされることを非常に気にしったんだな。
それでお不動さまさ、三、七、二十一日の無言の行をして、三人力を授けてもらいたいということで、願かけたわけだ。そしてお篭り堂さ二十一日間、垢離を

とって信心したところが、満願の日の夜、お不動さま現われて、

「三十郎、三十郎」

て呼ばらっだ。そいつ音立てねどええがったげんども、「はい」と、こう言うた。

それでパッと目覚ましてみたところ、

「なるほど、今日満願の日で、無言の行て言うたに、おれは〈はい〉と言うた。ほんでは二十一日が水の泡になったか」

て、力落して前に、三十郎石―今もある―七十貫目の石を持(たが)ってみたところが、肩まで上がった。そしてだんだんに考えてみたところが、力が半分にさっだ。音立てねど三人力にならればっかったげんども、音立てたために半分しかもらわんね。それでもその三十郎という人は角力はつよくて、東京まで行って、身なりは小さがったげんど力は強かったという話だ。

（嵐田勝見）

10　黄な粉じじい

じじとばばいだっけど。

ばば、黄な粉はたいっだけていうけな。ところが篩ないんだな。なんぼ探ねてもない。じじは何とも仕様なくて、褌取って、まずほろったんだ。

ところが、じじ褌でふるったのは、ええげんども、じじは屁やってしまった。そうすっどその黄な粉になって、パッと外さふっとんで行った。そうしたればカラスがいた。カラスは異なことつかしあがった。

しないも道理
ばば　かいぽだもの

異なことつかしあがる。何だべなて、家さじじ戻って来たど。ばばは腹病(や)めっどて、寝ていたど。

（遠藤　昇）

11　誰だ屁

冬になっど、俵編み、農家ではやったもんだ。そうすっど隣のじじは、俵編みにたのんで来たど。

ところがその人の屁は面白い屁で、「誰じゃ」ていうど、「プッ」とたれる屁だったど。そこからそこの家の若衆だは、

「あそこの家の餅盗んで、焙って食うべ」

て戸の口さ行ってみたところが、

「誰じゃ、プッ」

ていうから、誰かいたんでないかと思ったところが、そいつ知ってた奴が、

「あれは隣のじじの屁だから、かまうことない。あれに蓋さえもして呉れっじど、じじはかまね」

て、ダンボにからまった縄っぱしで蓋したら止まったど。そうすっどみんな連(せ)て来て、

「こんど、じじの屁も出ねから」
ていうて、「餅みな持って来て、焙って食うべ」というわけで、三四人で盗みに行った。ところが、ダンボに蹴っつまった者がおったど。そしたら蓋がはずっで止まってだ屁なもんだから、
「誰じゃ、ブッ、誰だ、ブッ」
ていうもんだから、若い奴ら逃げて行ったど。屁だって溜めておくど駄目になるもんだ。

（嵐田勝見）

12　屁たれ嫁

ええ女だげんど、寝屁をたれる女で、どこさも仲人されねくて、家さおはにして置いっだて言うわけよ。

ところがそいつを、
「寝屁ぐらいだれば、仕方ないから、女振りもええし、体格もええなだから、おれはもらうべ」
て、もらった。
ところが、舅は炉端であたってで、
「屁はずいぶん大きい屁たれるんだが、なんぼ大きい屁たれられっか、おれ許すから、たれでみろ」
「ああ、んだがっす。おれ、こたえているもんだから、ひどいくて居たどこだ。許してもらえっこんだら、おれ、屁たれっから、舅さま、アテギブチ押えてて呉ろ」
「何をそんなこと、アテギブチ押えていらんなね、なて、おれはそんがえ、アテギブチ押えんなねな屁、にさ（お前）たれっことが」
「いや、まず、アテギブチ押えてておくやい」
というたところが、嫁がたれた。その屁が大きくて、舅、アテギブチと一緒に火棚の上さあげらっじゃどこだど。そうすっど息子は帰って来て、

「何しった。そがなとこさ上がってあぶない。年寄りは何しったごど」
「いや、とんでもないごんだ。屁くらいだらええがんべと思って、屁たっで見ろなて言うたら、とんでもない、アテギブチがらみ、ここさ上げらっじゃんだ。こいつは送って行って、置いて来い。こんじゃ嫁に置かんねがら」
「いや、ほんじゃ仕方あんまい。置いて来んなんまい」
こういうわけで、家元さ送っどき、原っぱにすばらしい高いところの梨の木あって、その梨さ誰も石バイ投ったり、何かしても、もがんねもんだから、梨いっぱい付いっだ。
「あれはうまそうな梨だが、誰ももいで食った人がない。こいつ一つとって食だいもんだな」
て、夫は石投ったりしてみたげんど、そこまで届かね。
「そがえなもの、雑作ないな、おれ、屁でもがれる」
て言うて、
「なに、そんなことつかすごんだ。ほんじゃらもいでみろ」

ていうたら、尻をグラリひろげて、上に向けてやったら、梨はボタボタ落ちた。
そして食ってみたら、ちいと臭いげんど、うまい梨だ。
「ほんじゃ、こいつ持(たが)って家さ行って、親父は何て言うか食せてみっから、歩(あ)いでみろ」
て、そっから戻って連(せ)て来た。そして親父に誰も食ったていうことない梨をもいだんだし、梨食せたところが、
「いや、これはうまい梨だ、んじゃ仕方ない。そがなええことすっこんだら、まず置いて見んだ」
こういうことで、嫁は戻って来たど。どんびん。

（嵐田勝見）

13　上杉さまと鴨とり

稲刈りすぎてから、水張っておくじど、鴨だの水鳥だのが来て、そいつを殿さま獲ることを見たくて来たところが、そこに鴨取りの名人がいて、葭の生えっだどこさ行くとき、殿さま、鴨とりの後追っついて行ったど。そしたところが、

「そっと来い、そっと来い」

と言わっでくっついて行ったら、鴨取りが屁たっだど。殿さまの鼻先でよ。

「なんだ、この野郎」

て言うたど。そしたら鴨取りは、

「そっと来い、そっと来い、鴨取っどこだから」

て言わっだので、鴨取り屁たっじゃな、とがめる隙ないがったど。そして後で鴨取りが言うたど。

ばばとなぁ　床の中でも屁二つ
殿の前で一つようよう

て歌うたったところが、殿は、

「にさ（お前）、なかなか屁たれだげんども利巧なとこあっから、この際、とがめね」

というたど。

（斎藤捷太郎）

14　狐　退　治

前には、稲仕舞でも終（おえ）っじど、オタナサマの祭り、秋振舞などしったべ。

あそこらの親父、秋振舞に招ばっで行って、そして一杯御馳走になって来たところが、中田（米沢市中田）の方から来っどこ、椚林などあって原っぱあった。

その原っぱで、小晩方ごろ、家のガガ、迎えに来たていうわけよ。そしてそのガガ、

「帰り遅いもんだから、迎えに来たから…」
て言うたところが、御馳走になった親父言うには、
「なんだ、迎えになて、おれは何もわれになんど迎えになど来てもらわねったて、ええ」
「いやいや、ほだげんども帰りは遅いし、酔えだりして、そこらで事あっじど、悪れと思って、迎えに来たんだし、苞(つと)コなどおれ持って行んから」
て言うもんだもよ。
「いや、苞コなどおれ持(たが)がれっから、何もわれになど持ってもらうことないし、苞コなど、われんどこさやらんね」
て言うたところが、ガガ言うには、
「なに、お父さん、異なこと語ってるもんだ。苞コ、おれさ持(たが)がせろ」
「いやいや、われなの持がせらんね」
そして、
「われ先に立って行げ」

て言うげんども、いつでもうしろさばりなりたがるというんだな。んだもんだから、
「われぁ先に行けてば…」
て言うげんども、
「ええがら、苞コ持がせろ」
て、うしろさばりいる。そんで、
「われは狐だな」て言うたってよ。そしたら、
「何語ってんこんだ。狐だなて、おれ、おっかだぜ」
「いやいや、ほんね。ほんね。われは狐だ。化け方下手なんだ。ちゃんと、おれの目から見っど、尻尾見えんぞ。ほだげんど、おれも犬なんだ。おれの尻尾は見えっか」
と、こういうたところが、狐は、
「おれは尻尾見つけらっじゃがな」
と思ったというんだな。そんとき言ったそうだ。

「おれは、われと違って化け方は、犬だげんども、われのように尻尾見つけらっじゃりするおれでないから、もしおれに化け方聞きたいと思ったら、何時の何日夜、肥塚さ寝てる犬だから、聞きに来い」

て言うたところが、ガガの姿が消えてなくなった。

「ああ、やっぱり狐だったな」

て思って、約束した日に来たんだど。霜のふった朝に肥塚さ行ってみたら、狐血まみれになって死んでだ。そこの犬に噛み殺さっでだど。

（斉藤捷太郎）

15　古屋の漏

むかし、じじとばばいだったど。そして、じじとばば、達者なもんだから、稼いで畠だ、なんだて一生懸命かせいで金貯めたんだな。

そこで、馬喰は、ええ馬引っぱって行って、
「これ買っておけ」
「ほんじゃ買うかな」
て言うわけで、その馬買ったど。ところが夜になったど。雨ぁざぁざぁと降る。ばば、
「いや、今夜あたり、狼ぁ来(く)んであんまいか」
「いや、狼などは大したことない。ただおら家は古屋で漏る。そいつばっかりおっかないなぁ」
そのうちに馬喰はええ馬売ったもんだから、来た。また暗いもんだから、馬喰わかんね。馬屋のとこさ行ったげんど、なかなか馬出さんね。狼はまた古屋の漏るざぁ、よっぽどおっかねぇもんだと思った。そして馬喰は馬だと思ったべぁ、狼ば押えてしまったんだな。そうしてその狼にのったんだど。耳おさえてな。ほうしたら狼、古屋の漏るだどて、まず魂消たの、魂消ねのて、いっさんかけて山の方さ逃げた。ところが、叩き落さっでもいらんねもんだから、狼の耳、ぎっし

りおさえてのって、アパタパと駈けて行ったところが、山さ行って狼は穴のどこさ飛び込んだ。馬喰はつっかえって叩き落ちてしまった。

やっと気付いて、

「いや、おれ、馬さのった気して来たら、狼の畜生さのって来たんだな」

て、そこら痛くしてやっともどって来たど。んだから、われごどざぁさんねんだけど。とーびんとん。

（遠藤　昇）

16　カセドリの狐

正月、コバダイしたとき、夜中に便所さ行ったところが、狐が便所のとこさ昼眠してきづがったど。そして昼眠しったな、ちょいっと見つけたもんだから、ボッカイ持って、狐を思い切ってぶっ叩いたていうわけよ。

ところが狐はまず一間も踏ね上がって逃げて行ったていうわけよ。そしてその年の正月、やっぱり、カセドリというの、うんと好きな人だったそうだ。近所の若衆五六人にさそわっじゃわけよ。そいつ家の人、さっぱり知しゃね。

「カセドリ、今日始めて来たところだから、出てあえべ」

じじは好きなもんだから、そいつさ混ざって出たていうわけよ。そして綿入れを着ていだらええがったものを、褌一つでそいつさ混って出たていうわけよ。そして出たところが、次の日、家の人、

「じじはいない」

ということで来たわけだ。そしたら素足の足跡一つと、後はみな狐の足跡。そしてずっと村中の騒ぎになって、尋ねて来たところが萩の下まで来て、カセドリして、これから餅焙っていたところだがらって、自分はお湯さ入っていた。狐は決して人を殺さねが、裸にして連(せ)て行って、川さ入らせたもんだど。

（嵐田勝見）

17　栗　拾　い

むかし、じじとばばいだっけど。

栗が実った節の秋、栗拾いに行くていうわけで、朝飯炊いて、弁当つめるていうわけで、家の人、わらわらして呉っじゃ。油揚げ飯炊いっだけずだな。そいつつめて、カッコ背負って、中津川の境まで行って拾い方しったそうだ。

ところが昼飯ごろになった。向うの方から若い女が来たどな。と、ばば、

「ここらに栗は落ちてねが、もし」

て聞いた。したらば、「しぇー」とか言ったきり、何も言ね。

「はて、異なこと言う若い娘だな」

て、しばらく経ったら、向い山からコンコン、キンキンなて鳴く音する。

「はぁ、狐の畜生だな、バガにしてるな」

なて、それからそこさカッコ置いて、栗一生懸命拾った。昼飯食うべと思って、カッコ、ちょぇっと置いたカッコが、どこさ行ったか無いぐなった。こいつぁ探ね

ねでいらんねもんだから、一生懸命探ねっだら、ワラジだの何だの、みな切れてしまった。足は血だら真赤になって探ねだげんども、一つもわかんね。

「いや、こんどは家さ帰る道も分かんねぐなった。こりゃ困ったもんだ」

それから、ばば考えて水の流れる方さ、さがれば人家があるということは、おれ聞いでる。仕方あんまいと思って、沢さ降ちて、沢水の下る方さ、何とも仕様なくて、沢さ入って沢水の流れる方さかまわず下ってきたどな。して来たところが、沢さ人の影ひらっと写った。したら、ばば、

「誰か人であんめぇかな」

て言うど、

「ああ、おれ人だ。なんだ、まず」

「いや、おれ、山さ栗拾いに行ったげんど、とても分らね。飯も食(か)ねでこの通りで、家さ行がんねぐなって、水の流れ下って来たどこだ」

「そりゃひどがったな、まず上がれ」

て言(や)って、川からダラダラした身成りして上がって、そして助けらって送って

もらったどな。
それから、ばば、家まで送ってもらったどな。
「ほじゃがら、山さなど行くとき、油揚げ飯など持って行かんねもんだ」
て言わっだ。
油揚げ飯で、七里四方の狐は集まるもんだど。次の日、カッコ探しに行ったら、ちょこんとあったど。とーびんとん。

（遠藤　昇）

18　本間さま

むかし、本間さまざぁ、雑貨屋商売していたところが、本間さまの先祖の雑貨屋のおかたが、夢見たどこだな。
「いや、おれ、とんでもない夢見たどこだ」

「なじよな夢みたもんだ」
「おら家で、いろいろ品物をもらったりしている。大福帳、そいつ一匹の蛇出てきて、めちゃくちゃに喰い破らっだ夢だ。そしてこんど竿ばかりも何も、ぺろっと蛇に折らっだのよ。んだから、おれ、そんな気持悪い夢見たもんだから、商売でも何でも、だんだんさんねぐなるんであんまいかと思って考えたのよ」
　したところが、親父は、
「そうか、とんでもない。夢というのは、判じようがあってなおれはそう、その夢が大変気に入った」
「なじよなことに判じっか」
　て言うたら、
「大福帳は、蛇に食い荒さっだ。貸しったのも何もないごんだべしと言うげんども、大福帳じゃ（者）、おればかり（折れ秤）と判じた」
「そうか、それではおら家は繁昌すっか」
　と、こういうわけで、本間家の先祖はそれから長者になったど。

（斉藤捷太郎）

19　長者ばなし

伊藤家の何代か前の人が、山好きで、山さ山菜や茸とりに行ったてだな。ところが、そこで大蛇の化身に会ったわけだ。そして毎日、ヤキメシをもって行って、半分わけて呉って、懇意になったわけだな。ところが大蛇が言うには、

「世の中に恐ろしいもの、そなた何があるもんだ」

て、聞がっだていうわけよ。ところが、

「おれは金ほど恐ろしいものはない。金ていうものは、兄弟でも親子でも、何でも仇になってしまうから、金ほど恐ろしいものはないて考えている。ほんで間に合うほどさえあればええ、金くらい恐ろしいものはないて、おれは考えている」

ということを話してたていうわけよ。そしてだんだんに長くつき合いしてるう

ちに、不思議なこと感じたわけだ。
「これは何か変だ」
行き会うたんびに体のかげがちがう。弱くなってくる。長くつきあいしていっど、こいつは魔物だから、やられるということで、
「こんどは、おれも体弱くなって、山さも来らんねぐなった。明日から来る気はないなだ」
こう言うて、山歩きをやめにすることを語ったってな、その次の日、見舞いに来た。ところが大きい袋さ金いっぱい持(たが)って来たど。その金がもとで長者になったんだど。

（嵐田勝見）

20 由井正雪

由井正雪は忍術を心得っだていうわけで、侍が五・六人、寄り集まってよ、「正雪殿、あなたは大変、日本国内のことばかりでなく、キリストの術も心得ているて、いうもんだから、おらだに忍術というもの、なじょなもんだか、おらだにやって見て呉んねぇか」

そしたら、

「ほうか、ほんじゃ、なじょなもんだか、おれはこれからやっから、ちょっとしたとこ見てくろ」

て言うたど。そうしたところが、それまで天気のよかったのが、にわかに暗くなって来てよ、墨流したような天気になって来たかと思うど、竜光（たつびかり）などして来たってよ。そしてお雷さまが、しどもなくなったりして、百雷一時に落ちたような塩梅だったど。そしてこんど、雨が岡立ちになって来たど。同時にあたり見っど誰も人いなぐなって、自分一人になってしまった。そしたら川上か

らどんどんという大嵐の桶撒いたように、家など流って来て、とても恐ろしくなって来て、大水に逃れらんね。命もたまんねと思ったもんだから、

「どうか助けて呉ろ、助けて呉ろ」

と、こういうふうに、お侍が大声上げて、しゃなったど。そうしたところが、同時に、大水やらお雷やら、すかっと止んで、そのぐるりさ居た連中が、五・六人、青ざめで、

「いやいや、正雪殿、あなたの忍術には、ほとほと敬服した」

というたど。正雪は剣達者であり、術も心得た人だったど。

（斉藤捷太郎）

21　河童の硯

むかしあったけど。

あるところにおじいさんとおばぁさんがいだったど。じいさんは春先温かくなったもんだから、河原さ行って豆でも蒔くべと思って、鍬持(たが)って河原の畑で、どっこいしょ、どっこいしょとうなって、そうして今度、豆など蒔いて

一粒まいたら　千つぶ　一粒まいたら　万つぶ
一粒まいたら　千つぶ　一粒まいたら　万つぶ

なて、一生けんめいで豆まいっだところが、その河原のそばから河童コがでてきて、じじのうしろからそっと来て、じじぁキンタマ、きゅっきゅっと引張ったけど。そうしたところが、じじは、

「この野郎、いたずらして、ぶっ叩いてくれんぞ」

なて、追っかけて行くじど、川あっどこ、ヒョインと越えて行って、木の根っこさ尻かけて、

「じじ、ここまで来い」
なて言うずもな。
「いや、この野郎、ひどい野郎だ」
なて、また戻ってきて、一生けんめい豆蒔いでいっど、またうしろから来て、そっと来て、じじぁキンタマ、きゅっきゅっと引張る。何べんも何べんもじじはされるもんだから、
「今日は豆蒔きはわかんね」
家さ帰ってきて、次の日、町さ行って、モッチいっぱい買ってきて、木の根っこさ、べたべたとくっつけて、
一粒まいたら　千粒　一粒まいたら　万粒
一粒まいたら　千粒　一粒まいたら　万粒
なて蒔いたところぁ、また河童コ来て、うしろからキンタマ引張る。そうすっじど、じじは、
「こんどはのがさねぇぞ」

て、追っかけて行ったところぁ、ヒョインと川跳ねでって、木の根っこさ、また尻かけて、
「じじ、ここまで来い」
「こんどは逃がさねぇぞ」
なて、鍬持って追っかけっど、こんどは河童コは尻さモッチはくっついたもんだから、動かんねくて、
「いやいや、あやまった、あやまった。どうか助けてけろ」
て言うたど。そうすっど、じじ、
「今度から決してしねぇが」
「決してしね、悪れごどしねぇがら、その代り、おれ、宝物やっから勘弁して呉ろ」
なて言うもんだから、
「ほんじゃ、許すごで」
なて、河童コのモッチはがして呉で、放してやったところが、川の中さダボン

と入って行って、しばらく経ったれば、大事にしった河童の硯というもの持って来て呉っじゃど。

「この硯すっど、何でも思うことかなう硯だから、こいつ、いたましいなだげんど、今日上げ申すから勘弁して呉ろ」

なて。じじは喜んで、河童の硯もらって家さ帰ったど。

そこ、隣のじいさんが、そいつを聞いて、

「いや、それはええごんだ。おれも行って河童から、何か宝物もらって来んなね」

なて、真似して、次の日行って、川の傍さ行って待ってだげんど、いつまで経っても河童コぁ出てこねもんだから、

「いや、こんじぇ分かんね。ほんじゃ川のふちさ寝っだふりしていっど来っかも知んねぇ」

そうして川のふちさ横になって待っでだげんど、出て来ね。

いつまで待ってでも出て来ね。

そのうちに本当にじじは眠ぶってしまったど。そうすっど、こんどぁ河童コ出

てきて、じじ足、ずるずる、ずるずると引張って、川の中さずるずるもって行がっ
ではぁ、じじはとうとうそこで死んでしまったど。
んだから、人の真似ざぁするもんでないけど。とーびんと。

（加藤吉弥）

22　猿　蟹　合　戦

むかしあったけど。
猿と蟹ぁいだったど。猿なんていうな、何か味つけんだ、猿かしこい。猿ぁ飯食ってみたくて仕様ない、味付けだ。
「カニをだまがして…」
猿は柿の種もっていだったそうだ。そいつ取換えて食ってくれましょうと思って、カニどさ行って、

「おれぁ、うんとええもの持った。ヤキメシと取換えねが」
「何や」
「柿の種子、こいつ蒔いて置くんだれば、じきに伸びて実ぁなって食れる。ヤキメシなど食ってしまうど何もないそ」
なて。カニは考えっだ。そして柿の種子と取換えでしまったどな。そうすっどカニはまず、家さ行って、庭の畠さ、ええあんばいにして、そこさ種子蒔いたど。毎日水かける。ずんず、ずんずと柿の木ぁ伸びた。ど、カニは、
ならざら　ハサミ切る
ならざら　ハサミ切る
なて、毎日行って水かけて育(おが)したずも。そしてとんと秋になって、こんどは実ぁなった。
「こりゃ大したもんだなぁ」
て眺めっだら、どっからだか猿はチョロチョロと来て、
「ああ、なんだ」

「いや、柿なった。見てくろ、まず」
「ああ、ほだ。これうんとうまいもんだ」
「ほうか」
そう言うど、猿ぁ木さピタピタと登って行って、猿ぁ食いかけて渋いもんだ、
「おっとっと」なて、食いかけたの、やたらに投(ぶ)って、カニどさぶっつけたりなんかする。カニはぶっつけらっだもんだから、そこら痛くしてはぁ、まず、やっと家さ来た。猿の畜生はやたらにええどこばり食って逃げて行きあがった。
「よし、あの野郎ぁ、ひどいことして行きあがった。殺して呉んなね。よし仇とってくれんなね」
そしてまず、今度は、臼だの卵だの、蜂だのが来て、
「ほんじゃここさ呼ばって、やってしまえ」
なて評判したど。猿ぁ、家さ行ってから、またカニどこだまかして呉んなねなて、パタパタ、パタパタて来た。
「いたか」

「いた。よし、寄れ、まず」
「ああ、ほうか」
なて、カニの家に寄った。カニはまず、ちゃんとはぁ、炉のどこさ卵埋めっだわけだ。それから味噌ガメのどこさ蜂、井戸のどこさ自分が行って、厩の二階さ臼が上がって待ってる。そうすっど牛のカエシ（糞）は戸の口さ居た。そして知しゃねふりしていたんだな。そうすっど猿、
「うう、寒いな」
ていたけぁ、火所（ほど）、ほげだけぁ、卵がバエンとはねだ。「いたたた」。こんど、
「ああ、喉かわいた」
なて、井戸さ行って水飲むと思ったら、カニはきいっとはさんだ。
「いたい、うう」
なて言うけぁ、味噌なめてくれっど思ったら、蜂がぶうんと飛んできて、チカッと刺した。
「いたたた、こげなどこさ居られるもんでない」

なて、厩から逃げて行くと思ったら、牛の糞ゾロッというけぁ、猿はつんのめって、そうすっど二階から臼ぁドーンと落ちて来て、ビッチョリつぶさっだど。ほんで、仇討ったけど。どーびんとん。

（遠藤　昇）

23　五十騎町の猫明神

そこの家は侍だったんだどな。

ところで、猫を大事にする奥さんで、奥さんが便所さ行ったていうど、その猫が従いて行ぐわけだ。そいつも一ぺんや二へんだれば誰も何も思わねげんども、何年も何年もそういうような形なもんだから、旦那がちょっと不思議に思って、そして猫も心すれば魔物だから、おかたに対して何かそういうような関係があるということで、ある日、奥さんが便所に行ったとき、とたんに追っかけて行った

ど。

ところがその奥さんが出るまで、そこにちゃんとしているわけだ。して、「こんちくしょう、何してんだべ」

て憎くなってしまったもんだから、ぶった切ったというわけだ。ところがその首は便所の裏板さ上がって、すばらしいドダン、バダンて音がしたていう。

ところが、蛇の首さくっついて、そしてその蛇が落ちで来たど。

「そうであったか、そんでは、おれは殺すんでないがった」

ていうことで、祀ったのが「猫明神」だど。今でもいっぱい猫がいて、子産(な)したとき、殺すに殺さんねくて、そこさ納めて来っど、どこさか良縁が出るというもんだ。

（嵐田勝見）

24　時田の変り松

時田にある弘法さまの松は、枝一本だけが二葉松の中で五葉松なんだ。
そこに、むかし、貧乏な家があったど。弘法大師が夏、かんかんと日照りなとき休んだど。ところが水飲みだくて、非常にのど乾いで、
「ばぁさん、一つ水飲ませてもらいたい」
ところが、
「水は干魃で、とても川もこの通りなんだし、ちょっと待ってで呉ろ」
ということ言って、ばさま水汲みに行って、二時間もかかってやっと汲んで来て、弘法大師に飲ませたど。
「どこまで行って汲んできたごんだ」
と聞いたら、
「こういうどこに、水の出っどこあるもんだから、おれはそこまで行って汲んできた」

そこは、長橋のオカマというところだったど。
「いや、そがな不便なことさせておかんね」
て言うことで、その松さ袈裟かけていた枝が変ったもんだし、その家の傍さ杖を立てたら、そこから水が出たど。そいつが弘法水だど。ところがそいつが非常にええ水で、今でなんぼ干魃だって、出なくなったじゃないことになっているど。

あとがき

大道寺重栄さんに昔話を聞きに参上したのは、東京の「民話研究会」の内藤直子さんに教えられてであった。内藤さんは昭和三十八年の夏に、吉沢和夫さん、松谷みよ子さんの指導で南陽市を中心として民話を聞きにいらしたとき、たまたま、特別な期待もなしに話合ったということであったが、稀に見る、めぐまれた資質をそなえた話者であることがわかり、御連絡をいただき、私として大道寺さんを訪問した第一回目のときにお聞きした10話である。大道寺さんの人柄が、語りの中に十分生かされたものを思い、内藤さんのものと重複するだろうことは知りながら、資料集として記したものである。思い出していただけば、かなりの話をお持ちの方であることは確実で、今から楽しみである。

米沢市六郷の昔話は、遠藤太郎氏の経営されている幼稚園の一室をお借りして、多くの方々のお集まりをいただいてお聞きしたもので、この地区の第2回目に当る。中でも「河童の硯」はこの置賜地区で始めて採集された話で、この地区が最

上川の川ぞいに出来た部落であることと関係があるのであろうか。遠藤太郎氏、手引きをしていただいた渡部勉氏、それに話者の皆様に感謝いたします。この折には特に民謡などもお聞きしたが、別の機会としたい。

昭和49年7月26日

武田　正

かっぱの硯
長井市・米沢市六郷の昔話
昭和49年7月30日　発行
編者　武田　正
山形県南陽市三間通232の3

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十九年四月一日

山形短期大学民話研究センター
〒九九〇―二三一六
山形市片谷地五一五
山形短期大学附属図書館内
（電話）〇二三―六八八―七五四四